

NEJIREBANE, No. 79, 15. Jun., 1998

## 三重県産コメツキムシの記録(2)

岸井 尚

〒569-1044 高槻市上土室1丁目 10-6-410

*Hemicrepidius (Hemicrepidius) sinuatus sinuatus* (LEWIS, 1894) コクロツヤハダコメツキ

鈴鹿市長瀬神社(1♀, 4.VII.1994, 生川); 亀山市野登山(4♂♂, 24.VII.1992, 生川; 4♂♂, 26.VII.1992, 生川; 1♂, 16.VII.1992, 生川; 1♂, 2.VIII.1995, 生川; 1♀, 1.VIII.1996, 生川); 美杉村平倉(1♂, 23.VII.1989, 乙部); 大内山村南亦山(2♂♂, 15.VII.1995, 生川).

*Hemicrepidius (Hemicrepidius) desertor desertor* (CANDÈZE, 1873) ヒメクロツヤハダコメツキ

亀山市野登山(1♂, 12.VIII.1993, 生川; 1♂, 24.VII.1992, 生川; 2♂♂, 26.VII.1992, 生川; 2♂♂, 31.VII.1994, 生川; 1♂, 2.VIII.1995, 生川); 大内山村南亦山(1♂, 15.VII.1995, 生川).

*Hypoganus miyatakei* OHIRA, 1966 ミヤタケヒメツヤヒラタコメツキ(写真6)

亀山市野登山(2♂♂, 17.VIII.1996, 生川).

これまでに新潟・長野・山梨・愛知・奈良・愛媛・熊本から局所的に記録されており、三重県からは初の報告となる。ヒラタコメツキ族の中では特異なグループで一見ツヤハダコメツキ族の感じのするコメツキである。

*Corymbitodes gratus* (LEWIS, 1894) ドウガネヒラタコメツキ

亀山市野登山(1♀, 22.V.1992, 生川); 宮川村大和谷(1♀, 3.V.1994, 生川); 大内山村南亦山(1♀, 2.VI.1996, 市川).

*Eanoides puerilis* (CANDÈZE, 1873) (?) シリプトヒラタコメツキ

美杉村平倉(1ex, 2.V.1988, 乙部).

最近、ポーランドの D.TARNAWSKI (1995) が発表した *Selatosomus* 属のレビジョンでは本種の所属を *Selatosomus s. str.* として扱っている。PLATIA からの私信では従来日本の研究者が *puerilis* としていたものと TARNAWSKI の *puerilis* は異なるのではないかと伝えてきたが、確かに♂のゲニタリア

の図では中片の形状がおかしい。TARNAWSKI はブラッセルにある CANDÈZE のレクトタイプを検しているので真の *puerilis* を見ており、疑問の点は残るが、彼の著書を見る限りでは従来われわれが *puerilis* と見なしてきた種以外に当てはまるものがないので、ここでは従来扱いに従う。ただ、*puerilis* と同定していたものの中には別種が混入しているのではないかと以前から気になっていたもので今後精査の必要があろう。

*Acteniceromorphus kurofunei* (MIWA, 1934) ミヤマフトヒラタコメツキ

美杉村平倉(1♂, 31.V.1987, 乙部).

珍しい種ではなく、岐阜・愛知・奈良・和歌山という周辺諸地域から既に多くの報告例があるが、三重県からはこれが初めてになるようである。

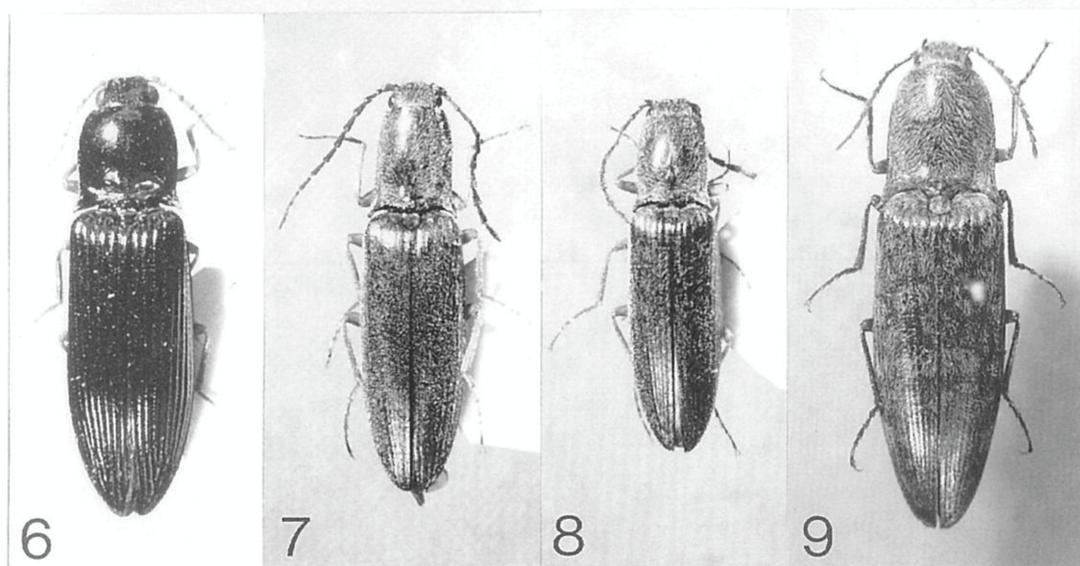


写真6-9：6. ミヤタケヒメツヤヒラタコメツキ；7. テングフトヒラタコメツキ；8. ミノフトヒラタコメツキ；9. ヨコゾナシモフリコメツキ。

*Acteniceromorphus tengu* (MIWA, 1934) テングフトヒラタコメツキ(写真7)

宮川村西谷(1♂, 4.V.1994, 生川).

長野県を基産地にする本種は、これまで新潟・千葉・静岡・岐阜・愛知・奈良・和歌山から知られ、個体数は少ない。類似種に次種 *A. minoensis* があり、これも同じような分布域と同一生息環境で得られる。最近 *minoensis* は山梨の鳳凰山近辺から、継続的に極めて多くの個体が得られており、三重県からの記録もあるが、*tengu* の方は三重県の報告例がなかったようである。

*Acteniceromorphus minoensis* (OHIRA, 1954) ミノフトヒラタコメツキ(写真8)

美杉村平倉(1♂, 2.V.1988, 乙部).

*Acteniceromorphus fulvipennis* (LEWIS, 1894) アカハネフトヒラタコメツキ

鈴鹿市山本町(1♂, 23.IV.1985, 生川); 美杉村平倉(2♀♀, 31.V.1987, 乙部).

次種と極めてよく似ており区別の困難な点がある、一般に大型、上翅が濃赤褐色で、近畿以北に分布するものが本種で、一方やや小型、上翅が橙黄色に近く東海以西に主として分布するものが次種と見て良いと思うが、その区別は簡単ではない。三重県からの本種の記録は見当たらなかったようである。

*Acteniceromorphus chlamydatius* (LEWIS, 1894) ベニバネフトヒラタコメツキ

美杉村平倉(1♂, 4.V.1988, 今村).

*Calambus japonicus* (FLEUTIAUX, 1902) クロツヤヒラタコメツキ

亀山市野登山(1♀, 11.VI.1994, 生川); 宮川村広クリ谷(1♀, 10.VII.1994, 生川).

*Calambus mundulus* (LEWIS, 1879) チャグロヒラタコメツキ

宮川村父ヶ谷(1♂, 15.VIII.1996, 生川).

*Neopristilophus serrifer serrifer* (CANDÈZE, 1873) アカヒゲヒラタコメツキ

上野市西山(1♂, 2.VII.1996, 横関); 美杉村平倉(1♀, 13.VII.1996, 市川); 大内山村南亦山(1♂, 7.V. 1995, 生川); 尾鷲市三木崎(2♂♂, 3.V.1995, 生川); 紀和町木津呂(1♂, 12.V.1996, 市川).

*Selatosomus (Pristilophus) onerosus* (LEWIS, 1894) トラフコメツキ

美杉村平倉(1♂, 2.V.1988, 乙部); 大内山村南亦山(4♂♂, 6.V.1995, 生川; 2♂♂, 20.V.1995, 生川; 1♂, 31.V.1995, 生川; 1♀, 7.VI.1995, 生川); 紀和町布引滝(1♀, 25.V.1996, 横関).

本州から九州までの、一般に低山地の耕作地周辺部に広く分布しており、特に珍しい種ではないが、最近では全国的に固体数が減ったようで、報告例が少なくなっている。

*Actenicerus giganteus* KISHII, 1975 ヨコズナシモフリコメツキ(写真9)

亀山市野登山(1♂, 31.V.1992, 生川).

三重県からの記録はあるが多いものではない、分布域は比較的広く、宮城から大阪までの9都府県から記録されている。シモフリコメツキ属はユーラシア大陸の東部地域で分化が進み、特に日本でそれが著しく、現在判明している種の大部分である25種(亜種を含む)が分布し、更に若干の未記載種がある。本種は其中でも最大の種の一つで、台湾産の *formosensis* や中国産の *fruhstorferi* などと同じ位の大型種である。

*Actenicerus pruinus* MOTSCHULSKY, 1861 シモフリコメツキ

亀山市野登山(1♀, 29.V.1994, 生川); 宮川村大和谷(1♂, 3.V.1994, 生川); 大内山村南亦山(6♂♂, 6.V.1995, 生川); 紀和町布引滝(1♂, 11.V.1996, 横関).

*Actenicerus kiashianus* (MIWA, 1928) ホソシモフリコメツキ

菰野町雲母峰(1♂, 29.IV.1993, 生川); 亀山市野登山(1♀, 24.VII.1992, 生川; 1♂, 20.VI.1993, 生川; 2♂♂, 29.V.1994, 生川).

かつて、1993年時に生川さんからの同定依頼で *A. aerosus* コガタノシモフリコメツキとして回答したのであるが、上記種の間違いであったのでここでおわびとともに訂正しておく。一般に東北・関東・甲信越の山地に広く分布する種で、以前 *yamashitai* の種名で知られていた。これまでに三重県からの記録例はないようである。

*Actenicerus aerosus aerosus* (LEWIS, 1879) ヘリアカシモフリコメツキ

美杉村平倉(1♂, 3.V.1989, 乙部); 大内山村南亦山(1♂, 28.IV.1996, 市川; 3♂♂, 6.V.1995, 生川; 1♂, 18.V.1995, 生川; 1♂, 28.V.1995, 生川; 1♂, 10.VI.1995, 生川; 1♀, 21.VI.1995, 生川).

従来 *modestus* という種名で知られていたが、最近(1997)の大平博士の研究により、上記のものが正しいことが判明した。それで従来筆者が *A. aerosus* コガタシモフリコメツキとして記録してきた種は別種であり、未記載種となったため近く改めて記載する予定である。

*Gamepenthesis similis* (LEWIS, 1894) ヒメキマダラコメツキ

亀山市野登山(1♀, 12.VIII.1993, 生川), 大内山村南亦山(2♂♂, 1♀, 29.VII.1995, 生川).

*Megapenthesis shirozui shirozui* KISHII, 1959 シロウズツヤケシコメツキ(写真10)

宮川村父ヶ谷(1♀, 15.VIII.1996, 生川), 大内山村南亦山(1♂, 29.VII.1995, 生川).

最近北海道からも報告されたが、一般に暖地の照葉樹林帯での灯火採集で稀に取れる種で、これまでに北海道・宮城・福井・奈良・和歌山・香川・熊本・隠岐島・対馬・屋久島などから局所的

に得られている。別亜種が奄美大島に産し、三重県からは初記録である。

*Procaerus (Agaripenthes) helvolus* (CANDÈZE, 1873) ヒメホソコメツキ

亀山市野登山 (4♀♀, 27.VII.1994, 生川; 1♀, 6.VIII.1994, 生川; 2♂♂, 1♀, 2.VIII.1995, 生川) . 大内山村南亦山 (8♂♂, 1♀, 29.VII.1995, 生川; 3♂♂, 19.VIII.1995, 生川).

*Hayekpenthès pallidus pallidus* (LEWIS, 1894) ホソキコメツキ

菰野町雲母峰 (2♂♂, 4♀♀, 28.VII.1993, 生川). 亀山市野登山 (2♂♂, 27.VII.1994, 生川; 1♂, 31.VII.1994, 生川; 3♂♂, 2♀♀, 6.VIII.1994, 生川; 1♂, 2.VIII.1995, 生川; 1♂, 1♀, 21.VIII.1996, 生川) . 宮川村父ヶ谷 (1♀, 22-23.VIII.1992, 松井; 1♀, 15.VIII.1996, 生川). 大内山村南亦山 (2♂♂, 19.VIII.1995, 生川).

照葉樹林帯を代表する種の一つと思うが、青森・岩手などからも知られている。三重県下では上記のように普通に得られており、灯火採集でも昼間花上でも見られる。

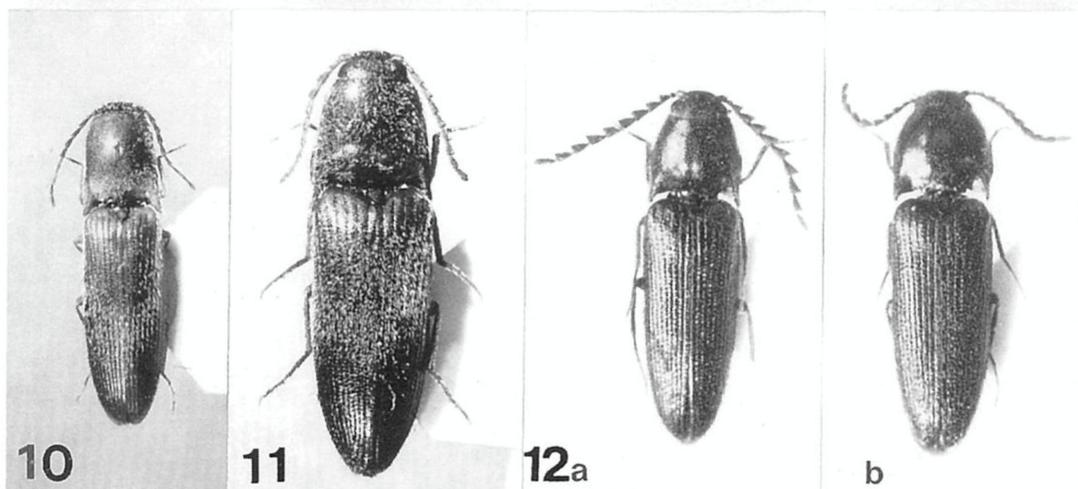


写真10-12: 10. シロウズツヤケシコメツキ; 11. フトナガコメツキ; 12. ホソヒメクロコメツキ (a♂, b♀).

*Ectamenogonus robustus* (KISHII, 1966) フトナガコメツキ (写真11)

宮川村父ヶ谷 (1♀, 31.VII.1988, 生川; 1♂, 15.VIII.1996, 生川).

従来用いられていた属名 *Penthelater* は、ヨーロッパの研究者達による属基本種の検討の結果, GURJEVA (1973) の *Rhodopenthes* とともに上記のものに変更され、それでこれまで *Ectamenogonus* とされてきた次種にはこのグループの基本種記載者である REITTER の名を冠した *Reitterelater* が新設されたものである。近似の *E. plebejus* コナガコメツキは三重県から既に報告されているが、本種の記録は初めてである。なお、BATES (1866) が台湾から記載した *Melanotus umber* は HAYEK (1990) が指摘したように *Penthelater* 属つまり *Ectamenogonus* 属であり、しかも彼女が述べているように *plebejus* に極めてよく似た種であることが判明しており、多分同種と見られるとも述べている *plebejus* は CANDÈZE (1873) が LEWIS のもたらした資料によって Nagasaki, Kagoshima, Hiogo のいずれかの地域から普通に (*assez commun*) 得たものに基づいており、台湾からも FLEUTIAUX (1906) 以後三輪 (1928, 1931, 1934) によりしばしば報告されている。筆者は日本産のものと台湾産のものを同種と見なすことにいささか疑問があるので、今のところ本邦産種の *plebejus* なる種小名は残しておいて良いと思っており *umber* は台湾産種の有効名と見ている。なお従来 *umber* を *Melanotus* 種として扱ってきたために生じた台湾のこのクシコメツキの名称については別の機会に論じたい。

*Reitterelater rugipennis* (LEWIS, 1894) アラハダチャイロコメツキ

宮川村父ヶ谷 (1♂, 22-23.VIII.1992, 松井).

前種の項で述べたように属名は最近変更されたものである.

*Haterumelater bicarinatus bicarinatus* (CANDÈZE, 1873) チャイロコメツキ

宮川村父ヶ谷 (1♂, 1♀, 15.VIII. 1996, 生川). 尾鷲市九木神社 (1♂, 31.VII.1993, 生川; 1♀, 13. VIII. 1995, 生川) .

*Ampedus (subgen.) carbunculus* (LEWIS, 1879) ヒメクロコメツキ

亀山市野登山 (1♀, 25.VI. 1992, 生川; 1♂, 26.VII.1992, 生川) . 上野市諏訪 (1♂, 28.IX.1996, 横関). 伊勢市朝熊町 (1♀, 28.iv.1991, 河北). 大内山村南亦山 (1♀, 18.V.1995, 生川). 尾鷲市三木崎 (1♂, 1♀, 3.V.1995, 生川) . 紀和町布引滝 (1♂, 11.V.1996, 生川) .

触角基部数節の形状などから本種は長く *Pseudelater* 亜属として同定されてきたが, 基本種である台湾産の *A. habunensis* とは多くの点で異質であり, 後者は奄美・沖縄に分布する *A. aritai* や本邦で見られる *A. niponicus* に近縁の種で, ヒメクロコメツキは台湾産の *A. tattakensis* と共に別亜属を創るべきものと思う.

*Ampedus (Pseudelater) otobei* KISHII, 1986 ホソヒメクロコメツキ(写真 12a,b)

宮川村父ヶ谷 (1♂: holotype a, 1♀: paratype b 10.X.1985, 乙部).

記載されてから10年以上経つが, このペアー 以外に採集されていない. 出現時期が10月という遅いことも理由の一つと思うが, コクロコメツキ類と混同されているのかも知れない. *carbunculus* と体形は似ているが, 亜属は *A. soboensis*, *A. nikkoensis* などと共に次種の入る *Pseudelater* であると見られる.

*Ampedus (Pseudelater) niponicus* (LEWIS, 1894) ツマゲロコメツキ

美杉村平倉 (2♀♀, 31.V.1987, 乙部).

*Ampedus (Ampedus) orientalis* (LEWIS, 1894) アカコメツキ

美杉村平倉 (1♀, 28.V.1988, 乙部; 2♀♀, 11.VI.1988, 乙部; 2♀♀, 15.VI.1988, 乙部; 1♀, 3.VI.1989, 乙部). 大内山村南亦山 (1♀ 黒化型, 31.V.1995, 生川; 2♀♀, 10.VI.1995, 生川; 1♀, 15.VII.1995, 市川; 1♀, 23.VII.1995, 市川; 1♀, 2.VI.1996, 市川; 1♀, 15.VI.1996, 市川; 2♀♀, 15.VI.1996, 生川).

本種は多くの赤い *Ampedus* 種の中では最も普通に見られるものであるが, 稀に上翅の黒化した, 一見クロコメツキ類に紛らわしいものがあり, 上記の多くの被見個体中でも南亦山 (1♀, 31.V.1995, 生川) がそれであった. これまで見たのは佐渡島からの1♀ と, 宮城県の高金山島からの3頭だけであるが, いずれも *A. ivanovi* クロコメツキと非常によく似た外観を持ち, これまでも混同されていた可能性の強いものである. しかし雌では貯精囊内の刺状突起の形態で明瞭に区別できる.

*Ampedus (Ampedus) optabilis optabilis* (LEWIS, 1894) オオアカコメツキ

美杉村平倉 (1♀, 2.XI.1986, 乙部).

*Ampedus (Ampedus) hypogastricus hypogastricus* (CANDÈZE, 1873) ハラアカクロコメツキ

四日市市水沢町 (1♂, 1♀, 2.IV.1996, 市川). 亀山市野登山 (1♀, 1.VI.1993, 生川) . 上野市西山 (1♀, 2.VII.1996, 横関). 上野市外山 (1♂, 19.X.1996, 横関). 大内山村南亦山 (1♀, 18.V.1995, 生川; 1♀, 15.VII.1995, 生川). 紀伊長島町大島 (3♂♂, 2♀♀, 1.II.1987, 乙部). 尾鷲市三木崎 (1♂, 3.V.1995, 生川). 尾鷲市桃頭島 (1♂, 4.V.1995, 生川). 紀和町布引滝 (1♂, 2♀♀, 11.V.1996, 生川). 紀和町木津呂 (2♂♂, 11.V.1996, 横関).

一般に暖地産の本種では, 腹節の基部数節か時には全部が黒化する傾向があるが, 三重県のものでは特にその点が顕著であった. また, 紀伊長島町の熊野灘にある大島産の個体では体が著しく肥大しており, 雌では 18 mm というこれまでに検した数多くの個体でも群を抜く大型のものが見られた. (つづく)

(きしいたかし)

## 神戸舞子ヶ浜のツシマヒメサビキコリ

岸井 尚

〒569-1044 高槻市上土室1丁目 10-6-410

採集地は神戸市の著名な海水浴場である舞子ヶ浜で、一見してヒメサビキコリ *Agrypnus (Colaulon) scrofa* でないことは分かったが、この付近での記録では、対岸の淡路島や同じ瀬戸内の岡山県玉野市などから多くのハマベオオヒメサビキコリ *A. (C.) tsukamotoi* がとれていることより同種と判断して



ていた。その後生殖器構造と共に詳しく検鏡したところ、今までこのような内海沿岸では見いだされていないツシマヒメサビキコリ *A. (C.) tsushimensis* で、原名亜種と同じものであることが分かった。これは種名のように対馬原産で従来、佐渡島(別亜種)・愛媛・島根・山口・福岡・長崎・壱岐・男女群島のような外海に面した沿岸地で見られていた種である。採集者の河上康子さんには誤同定をおわびすると共に、このような内海沿岸地での本種棲息を見いだされた功をねぎらいたい。

詳細は下記の通り。

*Agrypnus (Colaulon) tsushimensis tsushimensis* OHIRA, 1986 ツシマヒメサビキコリ  
ツシマヒメサビキコリ 1♂ (7.4mm), 神戸市舞子ヶ浜, 7.VI.1997, 河上康子(採集)

なお、*A. tsushimensis* と *A. tsukamotoi* は共に後翅が退化しており、海岸の砂礫地帯に棲息するので紛らわしい点があるが、触覚の第三節が長く倒円すい形のものが後者で、*A. tsushimensis* では極めて短く球形に近いと、体が明らかに小型であること、及び雄生殖器の中片及び側片形状に明らかな違いが認められることで区別できる。(きしいたかし)

## ちょっと気になる甲虫の情報 (IX)

オオイチモンジシマゲンゴロウは、林道のわだちにできた水たまりのような、つまらない水環境で得られることがしばしばある。タガメやゲンゴロウなどの水生昆虫が、想像以上に広い行動範囲をもっていることが明らかになりつつあるが、本種も例外ではない。強い飛翔力を駆使して、発生地から遠く離れ、途中の適当な水たまりで休みながら移動するケースがあるようだ。今回の記録も

その一例と思う。(芦田 久)



オオイチモンジシマゲンゴロウ

*Hydaticus conspersus* RÉGIMBART, 1899 オオイチモンジシマゲンゴロウ

## オオイチモンジシマゲンゴロウを京都で再確認

正木 清

〒612-0829 京都市伏見区深草谷口町5 1-1 1

*Hydaticus conspersus* RÉGIMBART, 1899 オオイチモンジシマゲンゴロウは本州では、主として東北・関東で採集されており、別亜種 *ssp. sakishimanus* が沖縄・西表に分布している。近畿地方では珍稀種の一つであるが、筆者は京都市内の自宅前を飛翔中の本種を採集したので報告する。

1 ex., 京都市伏見区深草, 9.IX.1996, 正木 清 (採)

その後、近くの小さい池や小川等を探したが追加個体は得られなかった。飯田 (1939) はマダラゲンゴロウ (まだらげんごらう) の和名のもとに当地より少し北の稲荷大社で一頭採集されたことを伝聞として報告している。以来、京都における本種の記録は半世紀の間見られなかったが、生息を確認しえたことは喜ばしい。写真撮影及び種々ご教示いただいた北山 昭, 芦田 久両氏にお礼申し上げる。

## 参考文献

森正人・北山昭 (1993), 図説日本のゲンゴロウ, 文一総合出版, 東京。

飯田信三 (1939), 京都産のげんごらう科, 昆虫界, 7(69): 671-674.

(まさききよし)

## 九州におけるクロキカワムシの記録

西田光康

〒843-0301 佐賀県嬉野町下宿甲1752-2

廣川典範

〒840-0202 佐賀県佐賀郡大和町久池井1839-46



クロキカワムシ

古い記録ではあるが、クロキカワムシ *Pytho yezoensis* KONO を九州から報告しておきたい。

1 ex., 7.X.1989, 熊本県八代郡泉村山犬切 (alt. ca. 1400 m)、西田光康(採)

4 exs., 3.X.1990; 10exs., 10.X.1990, 同所, 廣川典範(採)

土場に残っていた古いモミの樹皮下より採集した。蛹室にいた蛹を見つけ取り上げたところ、掌の中でみるみる内に羽化した。同定していただいた水野弘造氏にお礼申し上げる。  
(にしだみつやす・ひろかわふみのり)

## 日本産フサヒゲホソカッコウムシ属について

佐藤真矢

〒513-0034 三重県鈴鹿市須賀3-11-5



図1. イシガキフサヒゲホソカッコウ

最近まで、日本の *Diplophorusa* 属 (フサヒゲホソカッコウムシ属) は *D. shibatai* (MIYATAKE, 1965) アマミフサヒゲホソカッコウムシ1種のみであったが、1989年に *D. kitamurai* NAKANE イシガキフサヒゲホソカッコウムシが記載されて、現在2種が生息することになっている。イシガキフサヒゲホソカッコウムシは原記載に使用された1♂以外、記録は見あたらなかったが、筆者は石垣島オモト岳産の標本を検査することが出来たので、追加記録として報告しておく。

1♂, 沖縄県石垣島オモト岳, 6.V.1977, H. HIRAMATSU 採集 (図1)

本種は中根(1989)によるとフィリピン産の *D. tumidipes* HELLER, 1921 に似るが、前胸の後縁と口枝の色が黒く、上翅の点刻列が翅端まで達することにより、区別される。(HELLER, 1921) の付図を見ると、*D. tumidipes* は前胸背板の正中部は強く帯状に隆起し前部横溝は明瞭、上翅の前縁は前方に弧状に張り出すし、後脚脛節は強く膨らむなども

本種との区別点になると考えられる。

また、本種は日本産のアマミフサヒゲホソカッコウムシとは体色、特に上翅のカラーパターンが全く異なり、一見して区別がつくが、形態の違いについては今まで触れられていないので、これら日本産2種の外部形態、♂交尾器の違いを記述および図示しておきたい。

1. *Diplopherusa kitamurai* NAKANE,  
1989 イシガキフサヒゲホソカッコ  
ウムシ

♂は前胸背板は強く皺状点刻され、正中部はほぼ平滑で前部横溝は不明瞭。前胸腹板突起は基部から先端に向かって強く拡がり、先端部は裁断状。♂交尾器(図2)の側片先端部に毛はない。♀は未知。

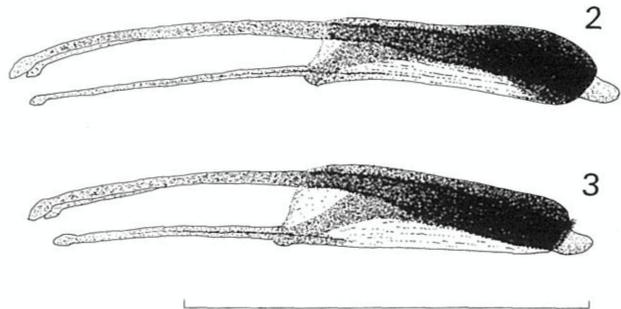


図2-3. ♂交尾器側面, Scale: 1.0mm. 2. *D. kitamurai*, 3. *D. shibatai*

2. *Diplopherusa shibatai* (MIYATAKE,  
1965) アマミフサヒゲホソカッコウムシ

♂♀とも前胸背板は不明瞭に皺状点刻され、正中部はゆるやかに帯状に隆起し前部横溝はやや明瞭。前胸腹板突起は基部から先端に向かってゆるやかに拡がり、先端部はまるみを帯びる。♂交尾器(図3)の側片先端部に微毛がある。

最後になるが、貴重な標本をお貸しいただいた的場 績氏に心よりお礼申し上げる。

参考文献

HELLER, K.M. (1921). New Philippine Coleoptera. philip. journ. sci., 19(5):531., 1pl.

MIYATAKE, M. (1965). New species and records of the Cleridae from the Ryukyu Islands. Ent. Rev. Japan, 18(1):21-22., 1pl.

黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之(1985). 原色日本甲虫図鑑(III), 保育社:152.

中根猛彦(1989). 日本の雑甲虫覚え書5. 北九州の昆蟲, 36(3):149., 1pl.

(さとうしんや)

## キドマルテントウダマシの多数採集例

生川展行

〒513-0015 鈴鹿市木田町2399

市橋 甫

〒510-1233 三重県三重郡菟野町菰野3949-5

マルガタテントウダマシの仲間は、体長が2mm前後と小さいこともあるが、ねらって採集してもなかなか得られないグループである。その中では比較的記録の多い *Dexialia minor* (CHUJÔ, 1941) ヒメマルガタテントウダマシでも、一度に多数得られることは非常に稀であり、その他の種については、一頭でも得られれば幸運である。今回筆者らは、*Bystodes kidoi* SASAJI, 1990 キドマルテントウダマシを多数採集することができたので、概略を報告しておく。

キドマルテントウダマシは、福岡県の城山で得られた2♂♂, 2♀♀基に1990年に記載された種で、その後の記録は筆者らが調べた範囲では、三重県四日市市小牧町(生川, 1993)で記録されているにすぎない。城山では山頂部の刈られたススキの中から、小牧町では道路側溝の落ち葉の中から得られ、小牧町ではその後も調査が進められたが追加個体は得られなかった。1997年3月の三重県北勢地方の虫屋の月例会で、キドマルテントウダマシの採集を出席者に依頼したところ、数日後官能健次氏よ



キドマルテントウダマシ

り、採れたとの連絡を受けた。確認したところ紛れもなく本種であった。早速現地を案内していただいたが、河川の中流域のアシ原で、普通の甲虫採集家ならばまずこのような所では採集しないだろうというような場所であった。官能氏によると、このアシ原の落ち葉をふるいにかけて採集したとのことで、北勢のメンバーで調査したところ、多数の個体を追加採集することができ、更に鈴鹿市内の河川敷のササ原でも得られた。

その後、1997年11月にも調査を行ったが本種を採集することはできなかった。今までの採集状況から判断すると、成虫の発生ピークは春のようである。蛇足ながらこの場所は河川の増水により半分ほどが削り取られてしまった。稿を草するにあたり、貴重な標本及び記録をいただいた天春明吉・横関秀行・官能健次・市川 太の各位に心よりお礼申し上げる。

ける。

三重県四日市市西村町朝明川河川敷: 1ex., 28.III.1997, 官能採集; 3exs., 1.IV.1997, 官能採集; 12exs., 12.IV.1997, 生川採集; 36exs., 12.IV.1997, 天春・市橋採集; 1ex., 14.IV.1977, 天春採集; 37exs., 14.IV.1977, 官能採集; 2exs., 7.IV.1977, 市川採集; 16exs., 8.IV.1977, 市川採集; 10exs., 8.IV.1977, 市川採集; 17exs., 19.IV.1977, 生川採集; 8exs., 19.IV.1977, 天春採集。

三重県鈴鹿市上野町鈴鹿川河川敷: 1ex., 8.IV.1997, 官能採集。

文献

城戸克弥 (1986) 福岡県宗像市城山産鞘翅目録の追加 (9). 北九州の昆虫, 33(3):149-155.

生川展行 (1993) 三重県におけるキドマルテントウダマシ. ひらくら, 37(1):13.

SASAJI,H.(1990) The family Mychothenidae of Japan(Coleoptera). ESAKIA SPE.ISS.(1):65-75.

(なるかわのぶゆき・いちはしはじめ)

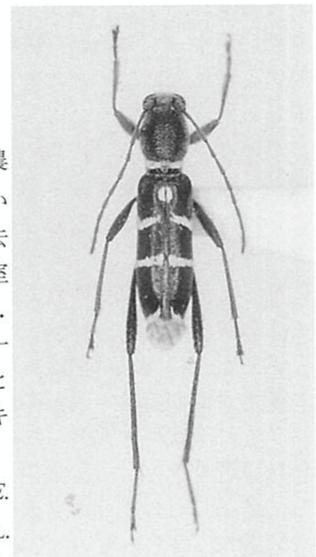
## 京都で羽化脱出したケズネチビトラカミキリ近似種 (*Amamiclytus* sp.)

渡辺弘之

〒606-8502 京都市左京区北白川 京都大学大学院農学研究科

1997年12月17日のこと、京都市左京区北白川にある京都大学大学院農学研究科の室内に、見たこともない小さなトラカミキリが張り付いているのを見つけた。これは日本のものではないのではないかと直感し、去る1997年8月、タイ北部チェンマイの有名なナイトバザールで買い、室内にぶら下げてある世界最大のマメ、モダマに発生源の見当をつけた。大きなさやごとポリ袋に入れておいたところ、1998年1月10日、次の一頭が羽化しているのが見つかった。さっそく水野弘造氏にお送りしたところ、台湾から知られる *Amamiclytus hirtipes* (ケズネチビトラカミキリ) に近似の別種\*であるとの同定をいただいた。

タイにはモダマ(マメ科)類は、*Entada glandulossa* OIEERR EX GGNEP., *E. pursaetha* DC.=*E. phaseoloides* MERR.=*E. Scheffleri* RIDL., *E. spiralis* RIDL. が分布するが、さやだけからは種名まで同定することは難しい。なお

*Amamiclytus* sp.

モダマ(*E. phaseoloides*) は奄美大島以南の琉球列島には分布する。いずれにしろ、このトラカミキリの食樹はモダマのさやであることがわかった。

同定いただき、発表をすすめていただいた水野氏に厚くお礼申し上げます。(わたなべひろゆき)

\* トラ年を迎えて京大の渡辺先生から見慣れぬ小型のトラカミキリが送られて来た。奄美のアマミケズネチビトラカミキリに近いことが一見して確認できたが、脚部の毛の生え方が異なるため、台湾を含め、フィリピン・タイ・スマトラ・ボルネオ等の *Ama-micylus* 属の標本を山下 晶氏から拝借し比較してみた。

本種(写真)は前胸基縁の白帯が中央で分断されないことから、比較標本のどれとも容易に区別され、同じ種と思われるものはなかった。この特徴を示す同属種として *A. squamifer* HOLZSCHUH, 1991、および *A. setosulus* HOLZSCHUH, 1991 が北部タイ (CHIANG RAI) から記載されていることを、奈良 一氏からご教示いただき、両種の記載文を検討したところ *A. squamifer* に近いことは確認できたものの、体色・触角長など微妙なところで一致せず、これら両種とも異なる別種と見なすのが妥当と思われる。かようにこの属は東南アジアでかなり多種類に分化しているものようで、種名の確認はできなかった。マメのさやから発生するカミキリは日本では聞かないように思うので、生態的に興味深い発見であろう。アマミケズネチビトラカミキリもモダマを調べればひょっとして.....

参考文献 HOLZSCHUH, C. (1991), Neue Bockkäfer aus Asien II, FBVA Berichte (60): 44-47, Abb. 49-51. (水野弘造)

## こうひ・ぶれいく (話のたね) - 2

"人を食った"ハネカクシ

秋田勝己

〒514-1108 三重県久居市市場町66, D-304

1996年4月27日の昼過ぎ、三重県一志郡美杉村平倉の河原で多数のナカアカヒゲブトハネカクシ *Aleochara curtula* (GOEZE) を目撃し、一部を採集したので生態観察の一環として報告しておきたい。

当日、日当たりのよい河原で食事の支度をしていたところ、そこに多数の本種が飛来した。地面においた白い皿には5~10頭程の個体がい回り、ラーメンの丼には、7~8頭の死骸が浮かぶという数の多さ。身体回りにもまとわりつくように十数頭が飛び交い、頭・顔・手などに着地すると嘔みついた。嘔まれるとかなり痛いし、なにしろ数が多いので不快であることこの上ない。歩いていてもブユのようにしつこく追ってくる。直射日光の当たる河原にいと多数の個体が、文字どおり襲いかかって来たが、薄暗い林内に入るとそこまで追ってくる個体は少なかった。気温の高い14時頃、個体数はピークに達し、日が陰り、気温が低下した16時半ばをすぎると飛来数はうんと少なくなった。

ウィリアム・アゴスタ\*によると本種の♂同士は極めて闘争的であるので、闘争に弱い未成熟♂は、成熟した♂の攻撃から逃れるため、未交尾♀のクチクラフェロモンと同じものを生産し身にまとうという。これにより成熟♂に齧られることからは逃れられるが、ただやたら抱きつかれるという煩わしさは残る。

従って、本種に齧られる筆者は『よっ、水も滴るいい男、男の中の男、男らしい男、少なくとも大人の男。』とか『ハネカクシに齧られることで、男ぶりを自慢してもよい。』と伊藤建夫氏はいう。ちなみに同氏は何度もまとわりつかれたことはあるが、一度も齧られたことはなく、まだこのハネカクシからは一人前の男として認めてもらっていないらしい。しかし、これはあくまでハネカクシもしくはハネカクシ屋の世界のことであり、「一般人」のそれでないことは明白である。なお本種は筆者を♂として認識したのではなく、その捕食対象たるハエの卵や幼虫、すなわちウジムシとして認識したのだという人もいることを敢えて付記して置く必要はあろうか。いずれにせよ、本種を同定し、またいろいろご教示いただいた伊藤建夫氏に感謝したい。

\*『ヘッピームシの尻』長野 敬ほか訳、青土社、1997年。

(あきたかつみ)

## 気になるテントウムシ

齋藤 琢巳

〒661-0045 兵庫県尼崎市武庫豊町3丁目2-25 サンヴェール武庫之荘913号

このテントウムシ(写真)と出会ったのは4年前の事で、西武庫公園のケヤキの樹皮下から得たのである。体長約2.4mm, 前胸背は一様に橙色で、前側縁部がやや張り出している。上翅は端部に橙色部を持たず一様に黒色で、波曲した被毛で覆われ、黄赤味のある光沢をかすかに帯びる。裏面は全体が橙褐色。附節は隠れ4節、触覚は11節、前胸腹板は一对の縦隆線を有し腿節線は完全な事等から、*Scymnus*の*Pullus* 亜属と思われる。だが、図鑑等で見る限り既知種に該当するものが見あたらない。外国からの移入種であろうと考え2年後、2頭目が得られたので水野氏を通じ佐々治先生のもとへ送って頂いた。翌年、上記公園近くのマンションに転居し、その年の秋に自宅マンション入り口付近のミカン幼木の横で3頭目を得た。それはアゲハチョウ *Papilio xuthus* LINNAEUSの幼虫を観察していた長男の手に止まったものであった。すぐ近くに発生源があるらしい。ところが住宅の管理人は管理不行き届きを指摘されたと捉えたらしく、その日の内にアゲハチョウの幼虫はすっかり駆除されてしまった。この時テントウムシも駆除されたかも知れないと心配していたが2週間ほど後に2頭追加出来た。自宅マンション入り口付近で、ゴールドクレスト(ウイلمマではない)の幼木から得たものであった。移入種の針葉樹であり、ホストに関係ありそうである。管理人に駆除される危険性を考え、午前2時を少し回ったところ追加採集を試みた。玄関前のゴールドクレストは並んで4本、やや離れて1本の計5本が植わっていた。ルッキングでは、ヒメアカホシテントウ *Chilocorus kuwanae* SILVESTRIの幼虫、蛹、成虫がいくつか見られた。何らかのカイガラムシがついているらしい。奥にはカクレミノも植わっており、それにもヒメアカホシテントウがついていた。暗いせいもあるが、本種ヒメテントウは見つからなかった。次にビーティングネットを広げて叩いてみた。その結果、本種はゴールドクレストからのみ得られた。餌の関係からか、樹勢の良くなさそうな木で得られた。幼虫はヒメアカホシテントウのみで本種らしいものは得られなかった。結局5本生えている内2本から12頭得られた。体長は約2.1~2.6mm, 前胸背がやや黒ずんだ個体も複数得られ、それらは前胸背基部が細く暗色か、さらに中央前方部にも一对の暗色部を有するものであった(頭部基部が前胸背板側から透過して黒く見える個体もある)。生態面はまだよくわからないが、もしゴールドクレストと共に移入してきたとすると、すでに各地に広く分布しているかも知れない。種に関する調査は佐々治先生にご無理をお願いしているが、日頃のご多忙に加え、近年東アジアでヒメテントウ類が多数記載されているらしく、結果が出るまでに時間がかかるとの事である。上記場所ではさらにルッキングにて4頭追加したが、2月現在、追加は得られていない。春になればまた採れる事を期待して毎日その木を眺めている。以下に、これまでの記録を示す。



*Scymnus* sp.

- |                   |                   |          |
|-------------------|-------------------|----------|
| 1ex. 9. I.1994    | 兵庫県尼崎市武庫元町県立西武庫公園 | 齋藤千恵美 採集 |
| 1ex. 11. X.1996   | 兵庫県尼崎市武庫之荘西       | 齋藤千恵美 採集 |
| 1ex. 23. X.1997   | 兵庫県尼崎市武庫豊町        | 齋藤圭輔 採集  |
| 2exs. 4. XI.1997  | 同上                | 齋藤千恵美 採集 |
| 12exs. 5. XI.1997 | 同上                | 齋藤琢巳 採集  |
| 3exs. 6. XI.1997  | 同上                | 齋藤千恵美 採集 |
| 1ex. 13. XI.1997  | 同上                | 齋藤千恵美 採集 |

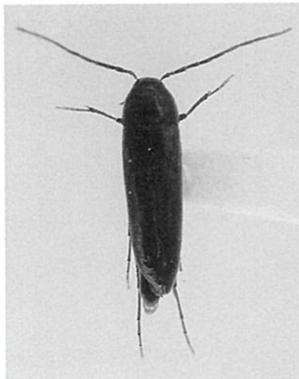
末筆ながら、ご多忙中ご無理をお願いしている佐々治先生、本報告をすすめて下さり、佐々治先生をご紹介下さった水野氏、そして、いつも協力的な家族に感謝する。(さいとうたくみ)

## ナガクチキムシ誤同定記録の訂正

水野 弘造

〒611-0002 宇治市木幡熊小路 19-35

*Enchodes orientalis* NIKITSKY 1973 はシベリア産のナガクチキムシの一種で、本邦産のコメツキガタナガクチキ *Enchodes crepusculus* (LEWIS, 1895) の近似種である。原記載文はロシア語のため私には読めないが、付図があり、その類似性から本邦各地で稀に採集される”ヒゲプトキイロホソナガクチキ(仮称)”に対してこの学名を当ててきた。ところが、豊嶋亮司氏が入手したシベリア産の *E. orientalis* の標本を実検させていただく機会があり(1997秋)、一見してヒゲプトキイロホソナガクチキとは異なることが明瞭であった。すなわち、*E. orientalis* は *E. crepusculus* (当初、LEWIS により *Synochroa crepuscula* と命名され、野村(1959)が *Paramikadonius* という独立新属に移したが、CROWSON(1965)は *Enchodes* LECONTE に属するとした。NIKITSKY(1973)もこれに従ったため、現在は *Enchodes* 属所属として取り扱われる)とほとんど同じ体色、体形である(前胸背に一对の深い凹陷を有するため、判別は容易)。一方、ヒゲプトキイロホソナガクチキは、上翅条溝が認めにくいくほどに微弱であり、体色は褐色でかなり小型であるほか、中・後脛節がノッチされるなどの特徴から *Enchodes* とするには無理がある。



ヒゲプトキイロホソナガクチキ 結局、ヒゲプトキイロホソナガクチキは現在のところ所属不明の未記載種と訂正するほかない。写真を添えるので、所属に関し心当たりのある方からのご教示をお願いしたい。なお、学名を誤用して発表された報文は、筆者のものを含め、下記のとおりである。同定依頼された方には多大の迷惑をおかけすることになったが、ここに訂正しておわび申し上げる。

1. 水野弘造(1992), 日本産ナガクチキムシ科甲虫都道府県別分布表, 関西甲虫談話会資料, (3):1-63.  
 2. 水野弘造(1994), ナガクチキムシ漫談(8), 北九州の昆虫, 41(1):25-3, 図5-6.  
 3. 川瀬英夫(1994), 平倉でヒゲプトキイロホソナガクチキ(仮称)を採集, ひらくら, 38(6):115.  
 4. 山地 治(1994), 岡山県から採集した甲虫類の記録, すずむし(128):7-13, 図54.  
 5. 山地 治(1997), 岡山県産昆虫目録, 鞘翅(甲虫)目, (株式会社ウェスコ, 534PP.):303.

最後に、豊嶋亮司氏には標本入手に尽力され、検視させていただいたご努力とご親切に対し心より感謝申し上げます。(みずのこうぞう)

## 虫屋の広場 (10)

### ハネカクシ談話会関西支部の第一回採集会

表題の採集会が連休始まりの1998年4月26日(日)に兵庫県篠山町の鏝市自然公園で行われ、参加者は8人。当日は天気にも恵まれ、典型的な里山の環境下、各自の目的とする甲虫の採集に溪流際を中心に精を出した。例年よりは気温も高く、地表性の甲虫も活動を開始しており、ハネカクシ以外ではオサムシも樹皮下等で観られ、またテンガンメクラチビゴミやマメダルマコガネも多産したようである。(伊藤建夫 記)

## 虫屋の広場 (11)

## 地域別総合甲虫目録 [II]

今回は区市町村単位の行政区域でまとめられたものを紹介する。

1. 新潟県津南町  
小池寛・桜井精(1988), 津南町の甲虫, 越佐昆虫同好会報, (78): 35-74. [65科, 549種]
2. 新潟県朝日町  
小池寛・島田久隆(1998), 岩船郡朝日町の甲虫類, 越佐昆虫同好会報, (77): 35-69. [67科, 683種]
3. 東京都大田区  
金子義紀ら(5名)(1997), 大田区のコウチュウ目, 他, 「大田区自然環境保全基礎調査報告書, 大田区の昆虫」(大田区, 209PP.4LL.): 130-178. [80科, 819種]
4. 長野県松本市  
降旗剛寛ら(3名)(1997), 「松本市史自然編集調査報告書, 第一集, 松本市の昆虫」(松本市), 150+5PP. コウチュウ目: 20-77. [72科, 1447種]
5. 香川県琴平町  
豊嶋弘ら(9名)(1996), 「町史ことひら(I)」(琴平町, 398+246PP., 30PLL.), 生物資料編; 1-246. コウチュウ目: 佐藤正昭・薬王智; 102-154. [97科, 1073種]
6. 愛知県設楽町  
大平仁夫ら(6名)(1996), 「設楽町誌, 自然編」(設楽町), 第5章, 動物, 第4節, 昆虫類, (8) 甲虫類: 449-551. [87科, 1152種]
7. 愛知県稲武町  
大平仁夫ら(6名)(1996), 「稲武町史-自然-資料編」(稲武町教育委員会), 第7章, 昆虫類, 第1節, 昆虫綱, コウチュウ目: 180-266. [92科, 1193種]
8. 熊本県蘇陽町  
大塚勲(1996), 蘇陽町の昆虫類, 「蘇陽町誌, 自然編」(蘇陽町), 257-441, コウチュウ目: 290-343. [62科, 736種]
9. 京都府弥栄町  
弥栄町(1995), 「ふるさと弥栄の自然--弥栄町自然環境調査報告書」, 152PP. 昆虫類リスト: 134-151. 鞘翅目: 143-147, 150. [35科, 231種]
10. 京都府夜久野町  
夜久野町(1994), 「夜久野町の生きもの--夜久野町の動植物ガイド」, 57PP. 昆虫類目録: 43-49. 甲虫: 45-47. [41科, 181種]
11. 広島県廿日市市  
佐々木悟ら(3名)(1994), 廿日市市の昆虫類, 「廿日市市の生物」(廿日市市教育委員会, 289PP., 16PLL.), 187-224. 鞘翅目: 矢野立志; 209-223. [57科, 469種]
12. 岡山県倉敷市  
青野孝昭・奥島雄一(1994), 「倉敷市生物目録」(倉敷市自然史博物館, 254PP.), 昆虫類: 93-233. コウチュウ目: 114-162. [74科, 996種]
13. 神奈川県茅ヶ崎市  
田尾美野留・岸一弘(1993), 茅ヶ崎市の甲虫, 神奈川虫報, (104): 13-68. [65科, 648種]
14. 熊本県玉名市  
大塚勲(1993), 玉名市昆虫目録, 「玉名市歴史資料集成(10), 玉名市の植物・動物目録」(玉名市), 63-113. コウチュウ目: 72-86. [55科, 428種]
15. 熊本県泉村

- 大塚勲(1993), 泉村の陸上昆虫目録, 「泉村の自然-資料編」(泉村, 211PP.), 51-192. コウチュウ目: 63-103. [82科, 1112種] (他に水生昆虫目録および洞窟産動物目録がある. 甲虫は8種)
16. 兵庫県宝塚市  
小田中健ら(16名)(1992-1993), 「宝塚の昆虫, II, IV. 甲虫(I-II)」(宝塚市教育委員会, 宝塚市文化財調査報告第28,30集). 1-168. 5PLL., 1-234. 4PLL. [62科, 806種] (全種写真付)
17. 千葉県我孫子市  
西村正賢ら(6名)(1992), 我孫子市昆虫類目録, 「我孫子市自然環境調査, 昆虫調査報告書」(我孫子市環境保全課). コウチュウ目: 126-177. [73科, 848種]
18. 茨城県高萩市  
高萩市(1991), 「高萩の動物」, 538PP., コウチュウ目: 小菅次男・成田行弘: 309-324, 517-524. [41科, 306種]
19. 神奈川県大和市  
平野幸彦ら(4名)(1991), 大和市の甲虫, 「大和市文化財調査報告書第41集, 大和市の昆虫」(大和市動物総合調査会), 139-201. [73科, 703種]
20. 三重県四日市市  
市橋甫(1990), 四日市市の動物相, 「四日市市史, 第1巻, 資料編(自然)」, 第4章, 動物: 267-434. 甲虫類: 373-414. [93科, 1260種](科, 種の数のみ)

前回、県別目録を紹介したところであるが、前後して埼玉県と石川県の新目録が発行された。

\* 埼玉県

吉越肇ら(7名)(1998), 埼玉県の鞘翅目(甲虫類), 「埼玉県昆虫誌, III」(埼玉昆虫談話会, 403PP.): 93-340. [107科, 2736種]

\* 石川県

石川むしの会・百万石蝶談会(1998), 石川の自然環境シリーズ. 「石川県の昆虫」(石川県自然保護課) 537PP. 8 PLL. コウチュウ目: 高羽正治ら5名: 102-251. [103科, 2732種]

昨年発行された岡山県, 広島県の目録と並んで、両県とも 2700 余種を収録しており、かつ引用記録に直ちに遡及できる点でも共に甲乙つけがたい質の高い目録となっている。埼玉県では、過去、斎藤良夫(1978)によって、90科, 1135 種がリストされていたが、今回、一挙に二倍以上に進展したわけで、関係各位の熱意が紙面から伝わってくるようである。石川県では高羽正治(1992)から更に 500 種が追加されたことになる。

(水野弘造 記)

## 会報

### 林 匡夫会長喜寿を迎える

本学会会長の林 匡夫博士が昨年喜寿を迎えられました。現在も、お元気に研究に採集に活躍しておられます。遅ればせながら心からお祝い申し上げます。林現会長は当学会創設時より研究活動を中心に学会の運営、維持に尽力されてきました。そして幾度かの経営危機の折りにも資金面も含めて多大の努力をされてこられたと聞いています。とりわけ阪神大震災後、大倉前会長が亡くなられたあとの学会存亡の危機の折りには、ご高齢にもかかわらず、涉外、資金など多面に涉り学会への支援を惜しまれませんでした。私たち運営委員一同は学会の運営に携わってからもまだ日も浅く、林会長の記念すべき節目に何か事業をするべき力もなく心苦しく思っていました。会長のさらなる健康と活躍を心から祈念し、ここに喜寿のお祝いを申しあげる次第です。

(運営委員一同)

## 第49回(1997年度)大会記録

1997年 12月 14日に大阪市立自然史博物館講義室に於いて開催。宮武頼夫博物館館長より祝辞をいただき、本会会長（林 匡夫）より答礼並びに本会と博物館との長年にわたる関わりについての歴史を含むあいさつがあった。続いて各種報告、会計（野村英世）・編集状況（林靖彦・伊藤建夫）・行事〔採集会及び9月例会〕（水野弘造）が行われ、最後に新会則の承認などなごやかな大会となった。午後の講演は、楠井善久氏『五島列島のコガネムシ類』、木村史明氏『食肉性甲虫の飼育法』の二題。いずれもスライドを豊富に使用して、人の知らぬ自然の側面に深く切り込んだ話に参加者一同魅了された。終了後は恒例になった阿倍野、桃谷楼に移って懇親会となり、夜遅くまで虫談に花が咲いた。

大会出席者（氏名記帳者のみ：アルファベット順）

秋田勝巳 芦田 久 陳 俊秀 藤野直也 濱口正博 春木 實 林 匡夫 林 靖彦 保科英人 穂積俊文 生谷義一  
 今坂正一 伊藤 昇 伊藤建夫 官能健次 河上康子 木村史明 楠井善久 北山 昭 三木三徳 森口 浩 森田誠司  
 水野弘造 中川 護 奈良 一 生川展行 野村英世 大石久志 奥田則雄 奥田好秀 大川親雄 大塚 勲 斎藤昌弘  
 初宿成彦 田中昭太郎 谷角素彦 豊嶋亮司 八木正道 山地 治 山本博子 安井通宏 横関秀行 吉川正彦 吉田正隆  
 吉田元重 (水野弘造 記)

## 3月例会(1998年)報告

1998年 3月29日、大阪市立自然史博物館に於いて開催された。山地 治氏（岡山市）による講演は、岡山県産甲虫目録の完成を記念して、同氏による岡山県の好採集地の紹介をからめての内容で、岡山県のナガゴムシを中心にしたゴムシ屋にはたまらない演題であった。講演後は自己紹介を兼

ねての一人一話で、各地から持ち寄った特長ある虫談義に花が咲いたが、中でも京都松尾神社の森にオオキノコムシ採集に入って、首つり死体を発見した体験談には一同唖然となった。

出席者 (アルファベット順)

青野孝昭 芦田 久 藤田國雄 濱口正博 林 靖彦 伊藤 昇 岸井 尚 北山 昭 楠井善久 松田吉弘  
水野弘造 中川 護 野村英世 野村 全 大築正弘 奥田好秀 初宿成彦 田中 勇 田中昭太郎 八木正道  
山地 治 安井通安 吉田正隆 吉田元重 (水野弘造 記)

## 会計報告

1997年(平成9年)の収支状況を報告します。本会の収支は永年に亘り赤字基調が続いていましたが、昨年の単年度収支は1996年度に引き続き黒字となり、1994年度の100万円に及ぶ累積赤字(繰越不足金)も解消し、記帳上では一応、次年度繰越金15,262円が出るまでになりました。『評論』52巻2号と『ねじればね』77,78号の印刷費と消耗品費等未払分が残っておりますので、実質的な黒字とは言えませんが、ここ2年間で着実に収支が改善されました。これは支出面での諸経費の節減と収入面での年会費が順調に納入されたことと、賛助会員(穂積俊文氏・三共(株)広島支店・ノボルディスク(株)岡山分室)の御支援に依るものです。今後とも会員の皆様のご助力をお願いします。(野村英世)

1997年度(平成9年度)収支決算書  
(自 97年 1月 1日 至 97年12月31日)

収入の部		支出の部	
会費	1,622,000	印刷代	1,513,490
バックナンバー代	111,000	通信費	266,460
別刷代	140,250	消耗品代	0
(含印刷実費負担金)		大会費	31,302
雑収入(広告料)	400,000	幹事会費	1,400
		行事費	17,000
		前年度繰越不足金	428,336
		次年度繰越金	15,262
計	2,273,250	計	2,273,250

## 日本甲虫学会のホームページ開設

ここ数年でインターネットが急速に普及してきました。この時勢に対応し、このたび当学会でもホームページを開設いたしました。内容としては、大会、例会、採集会の案内のほか、昆虫学評論やねじればねの総目次などを盛り込みたいと考えています。大阪市立自然史博物館のサーバーを借りて、一部運用をはじめています。アドレスは <http://www.mus-nh.city.osaka.jp/jcs.html> です。

ホームページに関するご意見・お問い合わせは運営委員の初宿までお寄せ下さい。(初宿成彦)

発行: 1998.6.15 日本甲虫学会

〒558-0011 大阪市住吉区菟田2-16-5 レジデンス寿202 林 匡夫  
Tel. (06) 698-2964 振替口座: 00990-8-39672  
<http://www.mus-nh.city.osaka.jp/jcs.html>

ねじればね原稿送付先

〒611-0002 宇治市木幡熊小路19-35 水野弘造 Tel. 0774-32-4929  
〒614-8371 八幡市男山雄徳8 E7-303 伊藤建夫 Tel.(Fax) 075-983-3491